共感性と援助成果が高校生のボランティア活動意欲に及ぼす影響

○山本陽一

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

キーワード: ボランティア活動、高校生、共感性

The influence of empathy and helping effect on volunteer motive of high school students.

Yuuichi YAMAMOTO

(University of Tsukuba Graduate School of Comprehensive Human Sciences)

Key words: volunteering, high-school students, empathy

目 的

ボランティア活動や募金といった計画的な援助行動においては、以前の活動経験がその後の活動意欲に影響することが明らかにされている。Vaehaert & Van den poel(2011)は、以前の募金経験が共感性と募金の意思決定を媒介することを明らかにした。中高生のボランティアを検討した山本(2011)は、活動の内的な報酬である援助成果(妹尾・高木, 2003)が、活動直後の活動意欲を高めることを明らかにした。しかしボランティア活動において、以前の活動経験がボランティア活動意欲に及ぼす影響については検討されていなかった。

そこで本研究では、共感性と以前に行ったボランティア活動から得られた援助成果が、高校生のボランティア活動意欲に及ぼす影響について検討を行う。

方 法

調査対象者: 都内の公立高校に通う高校1・2年生 961名(男子 345名、女子 602名、不明14名)。

調査時期と方法: 2012年3月上旬に、ホームルームの時間に質問紙への回答を行い、その場で回収した。調査の実施に当たっては、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た(承認番号23-5)。

調査項目:

- (1)共感性: 多次元共感性尺度(登張, 2003)の下位尺度である、共感的関心、個人的苦痛、気持ちの想像の3尺度より、因子負荷量の高い上位5項目、計15項目を採用した(5件法)。
- (2)援助成果: 以前に経験したボランティア活動の援助成果について、妹尾・高木(2003)、山本(2011)などを参考に13項目を独自作成した(7件法)。
- (3)ボランティア活動意欲: ボランティア活動への参加意欲について、“今後ボランティア活動に参加したい”という1項目で尋ねた(5件法)。

結 果

(1)共感性及び援助成果の因子分析結果: 共感性について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、登張(2003)と同じ3因子構造が得られたため、第1因子から順に“共感的関心($M=3.98$, $SD=0.71$, $\alpha=.82$)”、“個人的苦痛($M=3.07$, $SD=0.86$, $\alpha=.80$)”、“気持ちの想像($M=3.34$, $SD=0.75$, $\alpha=.76$)”と命名した(回転後の累積寄与率56.8%)。以前に経験したボランティア活動の援助成果に関する13項目については1因子構造が妥当と判断されたため、負荷量が足りなかった2項目を削除して“地域や社会に関心を持つことができた”、“感謝されてうれしかった”など11項目からなる尺度を構成した($M=4.79$, $SD=1.22$, $\alpha=.94$)。ボランティア活動意欲の平均値は3.74($SD=1.03$)であった。

(2)活動経験の有無による比較: 活動経験による共感性と活動意欲の違いを検討するために、調査対象者を活動経験の有無により活動経験群と活動未経験群の2群に分けて比較を行った。その結果、活動経験群は活動未経験群よりも共感的関心

Table.1 活動経験による共感性と活動意欲の比較

	活動経験	n	M	SD	t値(df)
共感的関心	経験あり	558	4.04	0.69	2.800 **
	経験なし	397	3.91	0.73	(953)
個人的苦痛	経験あり	552	3.03	0.84	1.464 n.s.
	経験なし	393	3.12	0.88	(943)
気持ちの想像	経験あり	551	3.39	0.72	2.401 *
	経験なし	392	3.28	0.78	(941)
活動意欲	経験あり	538	3.91	0.95	6.648 **
	経験なし	311	3.44	1.08	(847)

** $p<.01$, * $p<.05$ ** $p<.01$, * $p<.05$

Figure.1 援助成果の媒介効果(n=485)

と気持ちの想像とボランティア活動意欲が高かった。

(Table.1)。

(3)共感性と援助成果と活動意欲との関連: 共感性と援助成果と活動意欲との関連を明らかにするために、活動経験者を対象としてパス解析を行った。パス解析は、各水準より上位にある変数を説明変数とする重回帰分析(変数増加法)を繰り返し行い、投入された変数の標準偏回帰係数(有意水準5%)で変数の投入を打ち切った。解析の結果、活動意欲は援助成果と共感的関心によって規定されていた(Figure.1)。

考 察

ボランティア活動を行う高校生は、共感的関心や気持ちの想像といった他者志向の特性共感やボランティア活動意欲が高かった。この結果から、他者指向の特性共感が高校生のボランティア活動への参加を促進すると考えられる。またパス解析の結果から、他者指向の特性共感が高い高校生はボランティア活動に参加し、参加した際の肯定的な活動経験がボランティア活動意欲をさらに高めると考えられる。

引用文献

- 妹尾香織・高木修(2003). 社会心理学研究, 18, 106-118. / 登張真福(2003). 発達心理学研究 14, 136-148. / Verhaert, G. A. & Van den poel.(2011). Journal of Business Research 64, 1288-1295. / 山本陽一(2011). 日本社会心理学会第52回大会発表論文集, 125.

本論文の作成に当たり、ご指導いただいた松井豊教授(筑波大学)、調査にご回答いただいた公立高校の皆様へ感謝申し上げます。